宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第111集

宇都宮城跡

－令和3年度調査－

令和3年12月

宇都宮市教育委員会

宇 都 宮 城 跡

－ 令和３年度調査 －

令和３年 12 月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

序

宇都宮城は、中世から戦国期を通じて約500年にわたり宇都宮氏の居城であり、江戸時代には譜代大名が次々と入封した歴史ある城です。しかし、明治時代以降開発が進められ、土塁や堀が徐々に消滅し、その姿を失ってしまいました。近年の開発により記録保存のための調査が毎年数多く実施されておりますが、中世から近世にかけての貴重な遺跡が複合して存在することが確認されています。

今回、穴吹興産株式会社による集合住宅の建設に伴い、影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、近世の堀跡や当時から昭和時代までの遺物が確認され、宇都宮城の性格や当時の人々の生活を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、今回の発掘調査で得られたこれらの成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面におきまして、広くご活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで、多大なるご理解とご協力をいただきました関係各位、関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和3年12月

宇都宮市教育委員会

教育長　小　堀　茂　雄

例　言

1. 本報告書は、栃木県宇都宮市一条1丁目3-7に所在する「宇都宮城跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、令和3年3月15日から4月20日まで実施した。本調査は、穴吹興産株式会社による集合住宅建設工事に伴うもので、事業主の穴吹興産株式会社より委託を受けた株式会社真和技研が、宇都宮市教育委員会の指導の下に実施した。
3. 発掘調査の要項は、次の通りである。

遺跡番号　UUC-157

調査面積　565.5㎡

期間　【現地調査】 令和 3年　3月 15日　～　令和 3年　4月 20日

　　【整理作業】 令和 3年　4月 21日　～　令和 3年 10月 15日

調査担当者　青木 利文（株式会社真和技研 文化財調査部）

調査指導	宇都宮市教育委員会	教育長	小堀 茂雄
		教育次長	青木 容子
		文化課長	山口 遠雄
		文化課主幹	今平 利幸
		文化課文化財保護グループ係長	前原 義之
		文化課文化財保護グループ	近藤　真

4. 整理作業及び本書作成は、青木（利）を中心に青木 ゆかり・石塚 久則・岡田　萌・川邉 みずき・谷藤 龍太郎・富田 和美・樋下田 千鶴が行った。
5. 本書の挿図・図版作成は、青木（利）・石塚を中心に、青木（ゆ）・岡田・川邉・谷藤・富田・樋下田が行った。
6. 遺構写真は青木（利）が、遺物写真は青木（利）・青木（ゆ）・川邉が撮影した。
7. 遺構図作成は、有限会社 天田安平商店が行った。
8. 石器の実測・写真撮影は山崎 芳春が行った。
9. 航空写真撮影は、株式会社 真和技研が行った。
10. 本書の執筆は、第Ⅰ章 第1節を近藤　真（宇都宮市教育委員会文化課 文化財保護グループ）が、それ以外を青木（利）が行った。
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、宇都宮市教育委員会文化課の指導を得たほか、下記の諸氏・機関からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

大西 雅広　上野川 勝　永井 智教　平山 雄将　茂木 孝行　山下工業株式会社

凡　例

1. 遺跡・全体図におけるX・Y値は、平面直角座標Ⅸ系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 本報告書で用いる地図の出典および改変後の縮尺は図中に表示した。
3. 各遺構の縮尺は、図中にスケールで表示した。
4. 各遺物図の縮尺は、図中にスケールで表示した。
5. 土層注記においては、次の略号を使用した。

黒色土ブロック：BB　　ロームブロック：LB　　ローム粒：LR

鹿沼パミス：KP　　今市パミス：IP

目　次

序
例言
凡例
目次
第Ⅰ章　はしがき …… 1
　1．調査に至る経緯
　2．遺跡の環境
　3．調査の概要
第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 7
第Ⅲ章　まとめ …… 24
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　宇都宮城跡周辺遺跡 …… 2
第 2 図　近世宇都宮城想定図と発掘調査地点 …… 3
第 3 図　基本土層 …… 5
第 4 図　宇都宮城跡（令和３年度）調査区全体図 …… 6
第 5 図　外堀　断面図 …… 7
第 6 図　外堀　平・断面図 …… 8
第 7 図　外堀　断面図及び出土遺物（1） …… 9
第 8 図　外堀　出土遺物（2） …… 10
第 9 図　外堀　出土遺物（3） …… 11
第 10 図　外堀　出土遺物（4） …… 12
第 11 図　外堀　出土遺物（5） …… 13
第 12 図　外堀　出土遺物（6） …… 14
第 13 図　1 号竪穴　平・断面図 …… 14
第 14 図　1 号竪穴　出土遺物 …… 15
第 15 図　1 号溝　平・断面図 …… 15
第 16 図　土坑　平・断面図及び出土遺物 …… 16
第 17 図　ピット　平・断面図 …… 17
第 18 図　表土・カクラン　出土遺物（1） …… 17
第 19 図　表土・カクラン　出土遺物（2） …… 18
第 20 図　表土・カクラン　出土遺物（3） …… 19
第 21 図　宇都宮城下絵図と調査地点 比較図 …… 24

挿表目次

第 1 表　宇都宮城年表 …… 3
第 2 表　作業経過 …… 4
第 3 表　出土遺物観察表 …… 20

写真図版目次

図版１　1．調査区全景　直上（上が北）

図版２　1．遺構確認状況　全景（南から）
　2．外堀　掘削状況（北から）
　3．外堀　全景（南西から）
　4．ローム面　全景（南から）
　5．外堀　北セクション（南から）
　6．外堀　トレンチ１　セクション（南から）
　7．外堀　トレンチ１　遺物出土状況（直上）
　8．外堀　トレンチ２　セクション（南から）

図版３　1．外堀　トレンチ３　セクション（南から）
　2．外堀　トレンチ４　セクション（北から）
　3．１号竪穴　完掘（西から）
　4．１号竪穴　壁面穴（北から）
　5．１号溝　完掘（東から）
　6．１号土坑　完掘（西から）
　7．３号土坑　完掘（南から）
　8．４号土坑　完掘（南西から）

第Ⅰ章　はしがき

1．調査に至る経緯

今回の調査地区については、令和２年５月19日付けで穴吹興産株式会社より、一条１丁目３－７の宇都宮城跡（県番号3261）で予定されている集合住宅建設工事に伴い、文化財保護法第93条の届出が提出された。

５月20日付けで宇都宮市教育委員会文化課から栃木県教育委員会文化財課（以下県文化財課）へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が５月25日付けであったため、事業者と協議し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、６月17日～19日にかけて実施した。調査の方法は、集合住宅建設工事が予定されている場所に５本の試掘溝を設定し、遺構の有無を確認した。調査の結果、近世の堀跡と思われる遺構が確認された。

この調査結果を６月23日付けで事業者側に通知し協議した結果、集合住宅建設工事の内容変更は難しいとの結論に至ったため、集合住宅基礎部分の565.5㎡について記録保存の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の費用負担に関しては、穴吹興産株式会社が負担することとなり、令和３年２月18日付けで宇都宮市教育委員会教育長小堀茂雄と埋蔵文化財発掘調査に関する覚書の交換を行った。

発掘調査は、株式会社真和技研が調査主体となり、現地における発掘調査及び発掘調査報告書の作成を担当することとなった。

2．遺跡の環境

(1) 地理的環境

宇都宮城跡のある宇都宮市は栃木県の中央部に位置し、関東平野の北端に位置する。市内には鬼怒川・田川・姿川によって岡本台地・田原台地・宝木台地が形成されている。市内中心部には八幡山公園に向かって南北方向に走る宇都宮丘陵があり、この丘陵の西に釜川、東に田川が流れ、東一帯は田川によって形成された田川低地が広がっている。

近世の宇都宮城は宝木台地の東端の張り出しに位置し、東西約1.2㎞、南北約１㎞と広大なものであった。今回の調査区は宇都宮城跡の外郭部にあたり、西の出入口となる松ヶ峰門に近接する場所で、本丸より西に約500mの場所に位置する。外郭の西部は城内で最も高い場所となり、本調査区は標高が約119mで、本丸（約113m）より６mほど高い。絵図などを見ると、本調査区周辺には松ヶ峰門のほか、武家屋敷や牢屋があったと記録される。

現在の宇都宮城跡内にはビルや住宅が建ち並び、平成18年度に開園した宇都宮城址公園以外、宇都宮城の痕跡はほとんど見られない。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡としては、本遺跡（1）の北にある宇都宮丘陵や、本遺跡の南の宝木台地の縁辺部に分布する。

旧石器時代は宇都宮丘陵に八幡山裏遺跡（5）がある。

縄文時代は本遺跡の南にある旭陵遺跡（17）、西原境遺跡（22）などで遺物の出土が認められている。

弥生時代は本村遺跡（21）で中期～後期の竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代は遺跡数が増加し、宇都宮丘陵上には戸祭山兜塚古墳群（3）、八幡山公園古墳群（7）などの古墳群や、前方後円墳の祥雲寺境内古墳（6）、御蔵山古墳（8）がある。また、南にある本村遺跡（21）では古墳群と竪穴住居跡が確認されている。

奈良・平安時代は本遺跡南の台地縁辺に多い。下河原遺跡（15）、不動前３丁目遺跡（16）、不動前５丁目遺跡（18）、陽南１丁目遺跡（20）、西原境遺跡（22）、河原ヶ沼遺跡（23）、ガンセンター東遺跡（24）などで遺物の散布がみられる。また、宇都宮城本丸の調査では古代の竪穴住居跡が確認されている。

中世では本遺跡の該当する宇都宮城本丸の調査で近世宇都宮城以前の堀跡が確認され、かわらけなどの遺物から13世紀から16世紀にかけて連続的に利用されていたことがわかる。また本村遺跡（21）では14世紀から16世紀にかけての方形竪穴遺構、地下式坑が複数確認されている。

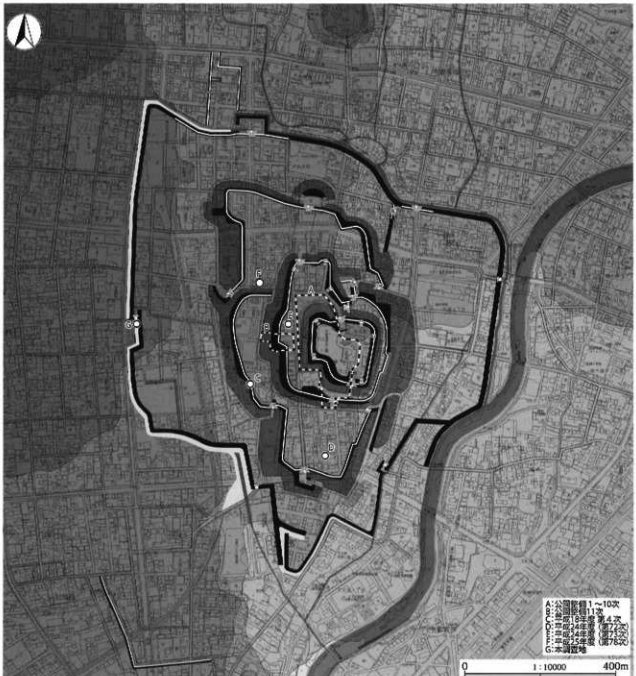
国土地理院 1/25000「宇都宮南部」「宇都宮東部」を改変

No.	遺跡名	時代と種別
1	宇都宮城跡（本丸遺跡）	中世から近世の城郭跡
2	勢田城跡	室町時代の城郭
3	戸祭山遺跡古墳群	古墳時代の古墳
4	戸祭元宮遺跡	古墳時代の祭祀遺
5	八幡山遺跡	旧石器時代集落跡
6	滝谷寺門内古墳	古墳時代の古墳
7	八幡山公園古墳群	古墳時代の古墳
8	御殿山古墳	古墳時代の古墳

No.	遺跡名	時代と種別
9	二荒山神社遺跡	古墳・奈良・平安時代の祭祀遺跡
10	おしどり塚	鎌倉時代の墳墓
11	福王氏の墓	鎌倉時代の墓石
12	御上人塚	江戸時代の高塚
13	戸田氏の館所	戦国～明治時代の館地
14	誕生石平遺跡	明治時代の石碑
15	下岡原遺跡	奈良・平安時代の集落跡
16	不動前３丁目遺跡	奈良・平安時代の集落跡

No.	遺跡名	時代と種別
17	旭城遺跡	縄文時代の集落跡
18	不動前５丁目遺跡	奈良・平安時代の集落跡
19	龍海院付近Ａ遺跡	縄文・古墳時代の集落跡
20	簗瀬１丁目遺跡	奈良～鎌倉時代の集落跡
21	本村遺跡	弥生・古墳時代の集落跡
22	西原遺跡	縄文・弥生・古墳～平安時代の集落跡
23	川原ヶ瀬遺跡	奈良・平安時代の集落跡
24	ガンセンター周辺遺跡	奈良・平安時代の集落跡

第１図　宇都宮城跡周辺遺跡



栃木県立博物館　平成十八年度企画展「名城　宇都宮城　―こころとまちの歩き変わり―」より加筆、作図

第２図　　近世宇都宮城想定図と発掘調査地点

第１表　　宇都宮城年表

平安時代	11世紀	このころ宇都宮城が築かれる。
鎌倉時代	1189（文治５）年	源頼朝が奥州藤原への遠征の途中、宇都宮に立ち寄る。
室町時代	1341（興国２・康応４）年	南朝方の郎党が東山城を占拠し、宇都宮城の北朝方と対立する。
	1358（延文３・応安元）年	関東管領上杉憲顕、宇都宮城を攻撃する。
	1380（天授６・康暦２）年	宇都宮持綱、裏切で小山義政と戦い戦死。
	1423（応永30）年	宇都宮持綱、鎌倉公方足利持氏に攻められて敗れ、敗北する。
	1455（享徳４）年	宇都宮等綱、鎌倉公方足利成氏に敗れ、宇都宮城城。
	1526（大永６）年	宇都宮尚綱、塩山で結城政朝と戦うが、その隙に従父の芳賀興綱に宇都宮城を奪われる。
	1539（天文８）年	結城政朝・小山高朝、宇都宮城下に侵攻。
	1549（天文18）年	宇都宮尚綱、那須高資と戦い、五月女坂で戦死。宇都宮広綱、関東に逃亡。その後、千生城城、宇都宮城を占拠。
	1557（弘治３）年	宇都宮広綱、佐竹義昭の支援を得て宇都宮城に復帰。
安土・桃山時代	1584（天正12）年～1585（天正13）年	北条氏直、宇都宮城を攻撃。※このころ、宇都宮城廃。多賀城に本陣を移す。
	1586（天正14）年	徳川氏勢・千生城攻撃、宇都宮城奪還する。城下に放火。
	1590（天正18）年	豊臣秀吉、宇都宮城に布陣し、宇都宮仕置を行う。
江戸時代	1597（慶長２）年	宇都宮城廃、領地を没収される。
	1598（慶長３）年	蒲生秀行が城主となり城と城下町の改修を行う。
	1600（慶長５）年	堀江秀治、宇都宮城に在陣し、中山道経由で関ヶ原に向かう。
	1617（元和３）年	堀川秀忠、日光社参の際、宇都宮城に宿泊。（最初の日光社参。以後徳川家で19回を数える）
	1619（元和５）年	本多正純が城主となり城と城下町の大改修を行う。
	1622（元和８）年	本多正純、領地を没収され出羽に流される。
	1843（天保14）年	堀川家綱、日光社参の際、宇都宮城に宿泊。（最後の日光社参）
	1868（慶応４）年	戊辰戦争で城内の建物が焼失。

本遺跡の該当する宇都宮城は平安時代に藤原秀郷または藤原宗円によって築城されたといわれている。鎌倉時代から戦国時代にかけては宇都宮氏が城主となっている。戦国時代の終わりの天正 18（1590）年には豊臣秀吉が滞在し、小田原征伐の戦後措置となる「宇都宮仕置」が行われた。また、慶長２（1597）年に宇都宮国綱は秀吉により突然改易され、これにより宇都宮氏は宇都宮城から追放された。江戸時代になると譜代大名が頻繁に入れ替わり、城や町が整備される。また城自体は日光社参における将軍の宿所としての役割も持ち、本丸に御成御殿が建てられた。このため、三代将軍家光をからくり仕掛けの天井を造って暗殺しようという「宇都宮釣天井」の伝説も生まれることとなる。幕末の慶応４（1868）年には戊辰戦争の戦地となり、宇都宮城のほとんどの建物や宇都宮の町並みの多くが焼失した。なお、この戦いで今回の調査地点である松ヶ峰門付近では激しい攻防戦が行われ、新選組副長であった土方歳三が負傷している。

その後、明治から昭和 40 年代にかけて堀が埋め戻され市街化されていく。一方、平成元年度から宇都宮城址公園整備のための発掘調査が行われ、本丸の約半分と二の丸の一部が調査された。発掘調査の結果では、近世宇都宮城以前の遺構として、13 世紀から 16 世紀にかけての堀や建物跡などの城館関連遺構が確認されている。また、平成 18 年度の調査では西館堀の一部が確認された。

３．調査の概要

(1) 調査の経過と方法

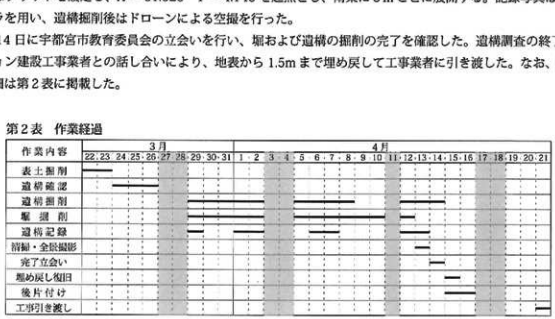
発掘は３月 22 日から開始した。バックホウにより表土、近代遺成土などを 60 ～ 70cm 除去し、ローム面まで掘り下げた。調査区は駐車場であったため、表土より約 40 ～ 60cm は砕石が敷かれ、場所によっては建物基礎が残る箇所もあった。表土掘削後には人力により遺構確認を行った。調査区の東半部は土坑、溝、ピットとともに近代以降のカクランが確認され、西半部では試掘で想定されていた堀が確認された。

東半部の遺構は、遺構輪郭全体を５～ 10cm 程掘り下げ、半截を行い、近・現代の遺物が出土した時点でカクランとして扱った。結果として竪穴遺構、溝、土坑、ピットが確認されている。一方、西半部の堀は 1.5m までは大谷石の礎石痕やカクランなどが多く、重機により除去したのち、確認面から約２m を人力で掘削し、掘削土は重機を利用し搬出した。また、トレンチを４か所設置し、底面まで掘り下げを行った。なお、堀の西立上りは遺構外となるため、調査区の西は段掘りで掘り下げを行った。

遺構記録は平面及び断面をトータルステーションで行ったが、一部の土坑や竪穴、溝の断面は手実測で行った。調査区にはグリッドを設定し、X = 61.620　Y = 4.145 を起点とし、南東に５m ごとに展開する。記録写真はデジタルカメラを用い、遺構掘削後はドローンによる空撮を行った。

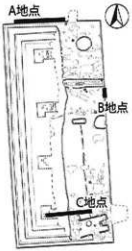
４月 14 日に宇都宮市教育委員会の立会いを行い、堀および遺構の掘削の完了を確認した。遺構調査の終了後は、マンション建設工事業者との話し合いにより、地表から 1.5m まで埋め戻して工事業者に引き渡した。なお、調査経過の詳細は第２表に掲載した。

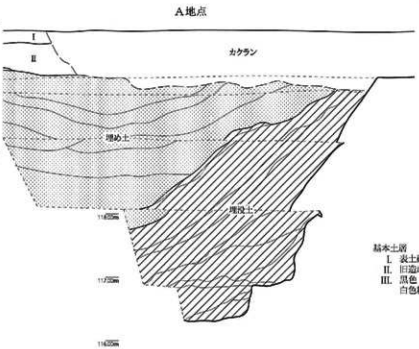
第２表　作業経過



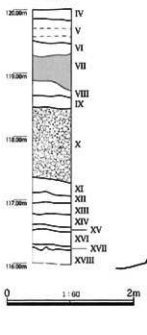
(2) 基本土層

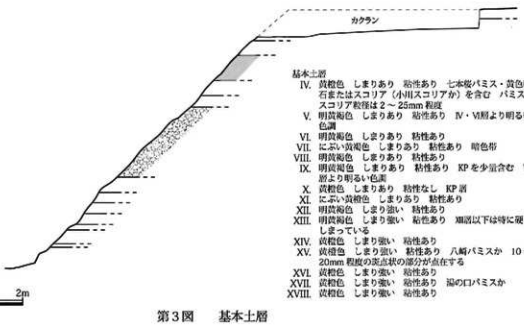
今回の調査対象区は565.5㎡を掘削した。地形的には宝木台地上にあり北から南に緩やかに傾斜する場所に立地する。遺構確認面はローム上面であるが、調査区の西半部は堀であり、東半部が該当する。上層部の整地やカクランの影響でおおむね平坦であるが、北から南に緩く傾斜する。基本土層は調査区の北壁のA地点と調査区東部のB地点、そして堀の壁面を利用したC地点を記録した。A地点のⅠ層とⅡ層は表土で、Ⅰ層は砕石層、Ⅱ層は近代以降の造成土となる。A地点の下部は堀の覆土であり、大きく分けて、明治時代の「埋め土」と、埋め戻される以前に埋まっていった「埋役土」に分けられる。B地点は旧表土となるⅢ層が確認できたが、調査区東部はカクランが多く、Ⅲ層の残存は部分的である。C地点は堀トレンチ4の延長上に設定した。ローム面の上位のⅢ層からの記録である。Ⅳ層には七本桜パミスや黄色軽石を含む。Ⅶ層は暗色帯となる。Ⅹ層は鹿沼パミス層である。Ⅺ層以下ではⅩⅤ層とⅩⅦ層で土中に火山灰が含まれる可能性がある。





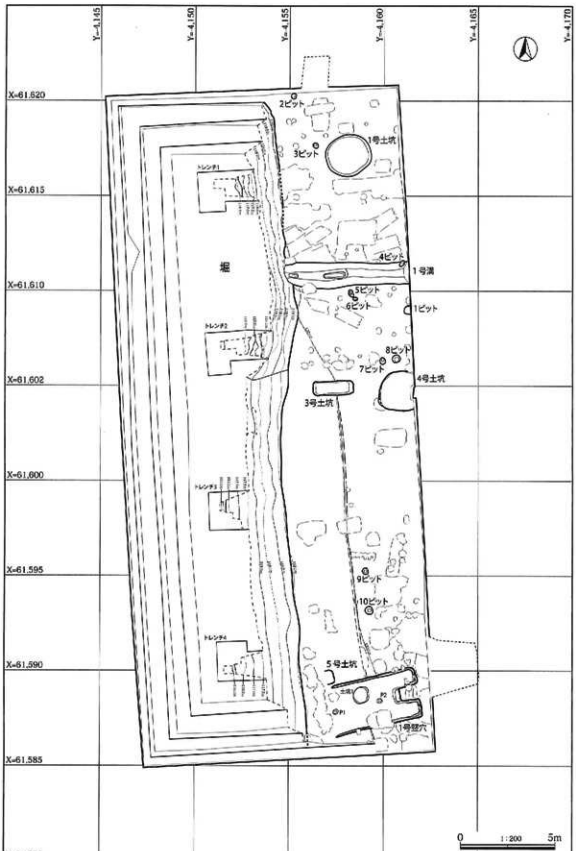
基本土層
Ⅰ. 表土砕石層
Ⅱ. 旧造成土、近代以降の複数の層を確認
Ⅲ. 黒色　しまりあり　粘性あり　ローム（～10mm）と白色粒を5%含む　部分的に確認される





基本土層
Ⅳ. 黄橙色　しまりあり　粘性あり　七本桜パミス・黄色軽石または黄色スコリア（小川スコリアか）を含む　パミス・スコリア粒径は2～25mm程度
Ⅴ. 明黄褐色　しまりあり　粘性あり　Ⅳ・Ⅶ層より明るい色調
Ⅵ. 明黄褐色　しまりあり　粘性あり
Ⅶ. にぶい黄褐色　しまりあり　粘性あり　暗色帯
Ⅷ. 明黄褐色　しまりあり　粘性あり
Ⅸ. 明黄褐色　しまりあり　粘性あり　KPを少量含む　Ⅹ層より明るい色調
Ⅹ. 黄橙色　しまりあり　粘性なし　KP層
Ⅺ. にぶい黄橙色　しまりあり　粘性あり
Ⅻ. 明黄褐色　しまり強い　粘性あり
XIII. 明黄褐色　しまり強い　粘色あり　XIII層以下は特に硬くしまっている
XIV. 黄橙色　しまり強い　粘性あり
XV. 黄橙色　しまり強い　粘性あり　八崎パミスか　10～20mm程度の斑点状の部分が点在する
XVI. 黄橙色　しまり強い　粘性あり
XVII. 黄橙色　しまり強い　粘性あり　福の口パミスか
XVIII. 黄橙色　しまり強い　粘性あり

第3図　基本土層



第４図　宇都宮城跡（令和３年度）調査区全体図

第Ⅱ章　遺構と遺物

本調査では調査区の西半部全体が堀であり、東半部はローム面で竪穴遺構、溝、土坑、ピットが確認された。宇都宮城の城絵図では本調査地点の西辺りに松ヶ峰門が推定され、門から南北に延びる空堀が描かれている。今回確認された堀はこの空堀であると考えられる。また城絵図では堀の東は土塁となっている。このため、東で確認された遺構やカクランは、土塁が造られる以前の遺構か、土塁が無くなった近代以降に掘削されたカクランとなる。両者は覆土が黒色土をベースとしており、覆土の違いから時期の決定ができなかったため、掘削で出土した遺物に近代の遺物がある場合をカクランとし、出土しなかったものを遺構として取り扱った。

外堀

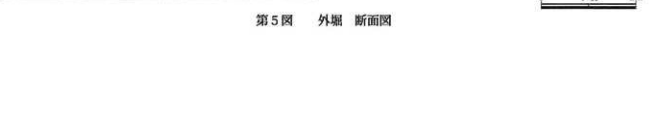
本遺構は調査区西半部全面で確認された。遺構としては東部の立ち上がりのみが確認でき、北・南・西は調査区外となる。規模は南北約34m、幅は遺構のおおよそ中央から北部で約8m以上、南では約6m以上となる。深さは確認面からの計測で、トレンチ1・2が約3.5m、トレンチ3・4が約4m以上となる。

東の立ち上がりの傾斜はトレンチ1・2では約55～60°、トレンチ3・4では45°程度である。遺構下部では段状の平坦面が確認でき、平坦面からさらに深く掘り込まれていたため、最下部は確認できなかった。なお堀東部の上端はN－4°－Eに傾く。

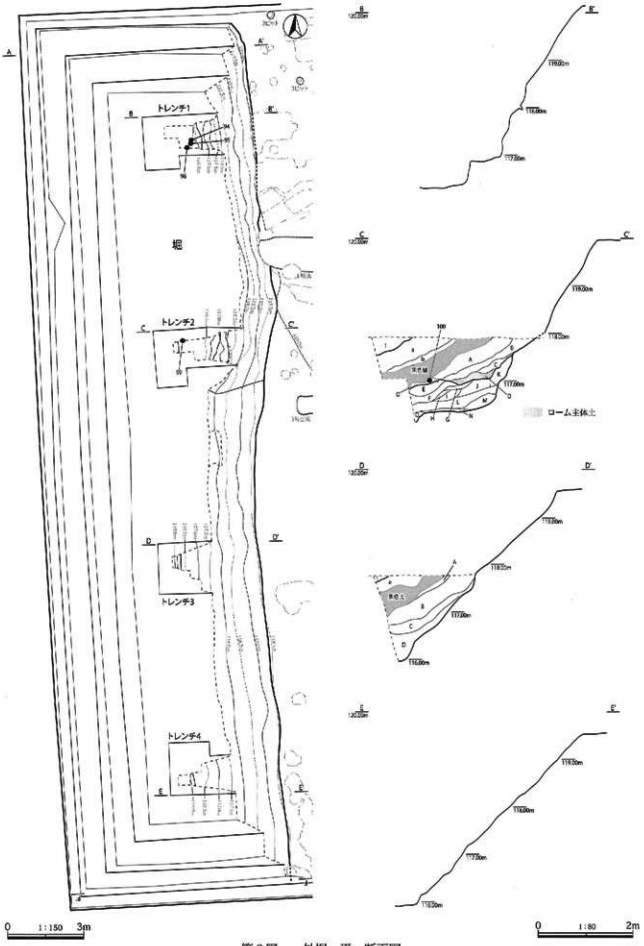
層位は上層の埋め土と下層の埋没土に分けられる。埋め土は明治20年代に埋め戻された時の土層群であり、土層記号はアラビア数字（1～）を用いた。土層群全体にロームブロックを多く含んでいる。一方、埋没土は自然崩落などにより埋まったとみられる覆土である。この土層中には黒色土をベースとする特徴的な層が全体を通して確認でき、これを黒色層とした。なお、黒色層上位にある埋没土層群の土層記号は小文字のアルファベット（a～）とし、下位にある層位群の土層記号は大文字のアルファベット（A～）とした。また、黒色層下位では堆積土中断絶や平坦な堆積層があり、堀の拡張や掘り返しなどを行った可能性が考えられる。

出土遺物は覆土全体で陶磁器類、かわらけ、瓦質土器、瓦、金属製品などが出土している。層位で細分すると、埋め土と黒色層上位の埋没土からはガラス瓶や近代陶磁器類が出土している。一方、黒色層や黒色層下位では江戸時代までの遺物が出土し、近・現代の遺物は確認できない。また黒色層下位からは、かわらけ3点（95・96・97）と焙烙状の土器（100）が出土した。

以上のことから、埋没土のうち黒色層までが江戸時代の埋没土となり、黒色層上位は明治20年代に埋め戻されるまでの近代の埋没土となる。



第5図　外堀　断面図



第6図　外堀　平・断面図

C-C'

埋め土

1. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～60mm）を20%、KP（～5mm）を10%含む

遺構埋土

a. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB・小礫を少量、KP（～10mm）を10%含む
b. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LKを少量、KP（～5mm）を10%含む

黒色層、黒色　しまりあり　粘性あり　LB（～10mm）を少量、KP（～2mm）を微量含む

A. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　強を少量含む
B. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）を少量、KP（～10mm）を12%含む
C. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～30mm）を少量、KP（～2mm）を微量含む
D. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～30mm）を少量、KP（～2mm）・炭化を10%含む
E. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　ローム主体　LB（～200mm）を30%、KP（～10mm）を10%含む　軟質色が20%混じる
F. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～50mm）・KP（～2mm）を10%含む
G. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　KP（～2mm）を10%含む
H. 褐褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）を10%、KP（～3mm）・焼赤色砂（白砂）を10%含む
I. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～50mm）を20%、KP（～5mm）・軟赤色粒を10%含む
J. 黒褐色　しまりあり　粘性強い　LB（～40mm）を10%、KP（～5mm）を30%含む
K. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　KP（～10mm）主体　LB（～40mm）を少量含む　3層の土が部分的に混じる
L. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～40mm）を少量、KP（～10mm）を30%含む
M. 褐色　しまりあり　粘性あり　KP（～10mm）を40%含む
N. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　ローム主体　KP（～5mm）・焼赤色砂を少量含む
O. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　KP（～2mm）を20%含む

D-D'

埋め土

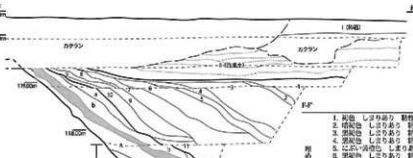
1. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を20%、KP（～5mm）を10%含む

遺構埋土

a. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を20%、KP（～5mm）を10%含む

黒色層、黒色　しまりあり　粘性あり　LB・KP（～4mm）を微量、小礫を少量含む

A. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LBを微量、KP（～1mm）を極微量含む
B. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～30mm）を10%、KP（～5mm）を少量、小礫を微量含む
C. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）を少量、KP（～3mm）を20%含む
D. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を10%、KP（～10mm）を少量含む



埋め土

1. 暗色　しまりあり　粘性あり　LB（～50mm）・KP（～10mm）を10%含む
2. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）・KP（～10mm）を少量含む
3. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を10%、KP（～5mm）を少量含む
4. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を7%、KP（～5mm）を微量含む
5. 黒色　しまりあり　粘性あり　LB（～30mm）・KP（～5mm）を少量含む
6. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を7%、KP（～5mm）を微量含む
7. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～80mm）を7%、KP（～5mm）を極微量含む
8. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）を少量、KP（～2mm）を極微量含む
9. 黒色　しまりあり　粘性あり　LB（～60mm）を少量、KP（～2mm）を極微量含む
10. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～40mm）を微量、KP（～5mm）を少量含む
11. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～40mm）・小礫を少量、KP（～3mm）を少量含む

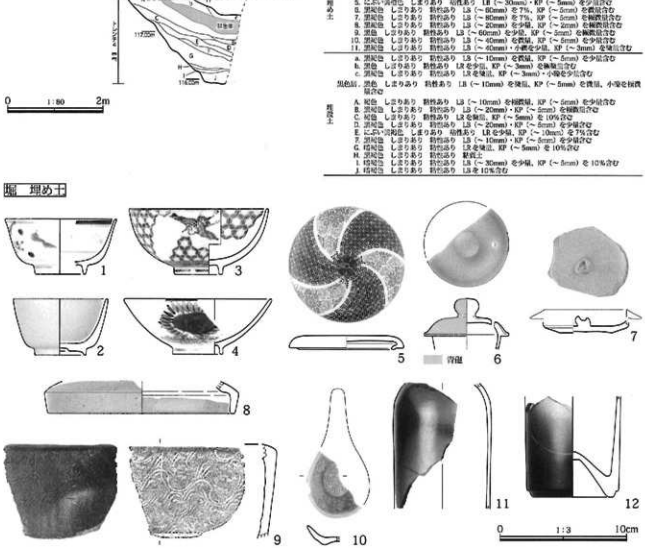
遺構埋土

a. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～10mm）を微量、KP（～5mm）を少量含む
b. 黒色　しまりあり　粘性あり　LBを少量、KP（～3mm）を極微量含む
c. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LBを微量、KP（～3mm）・小礫を少量含む

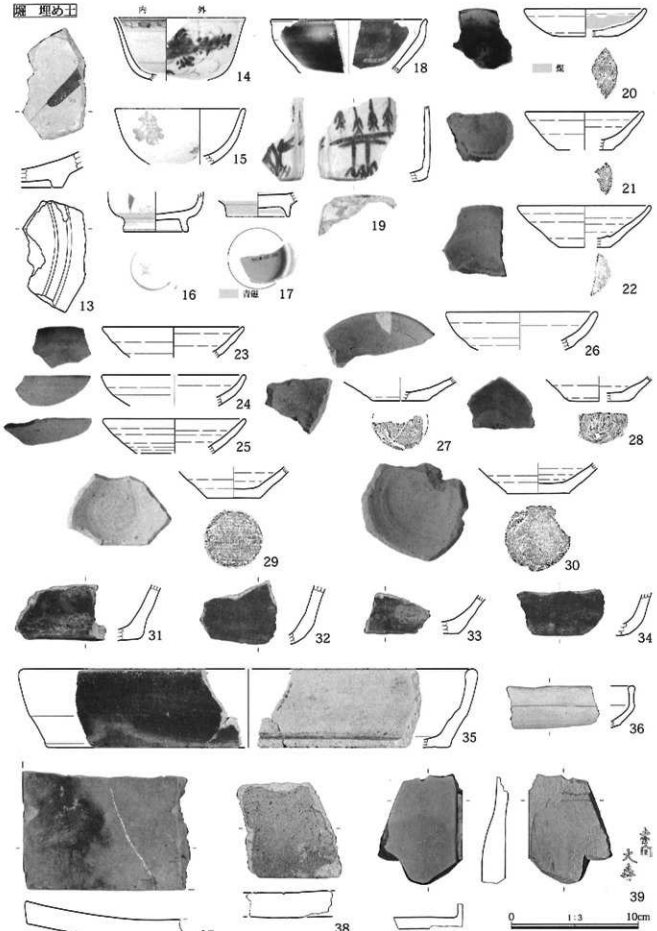
黒色層、黒色　しまりあり　粘性あり　LB（～10mm）を微量、KP（～5mm）を微量、小礫を極微量含む

A. 暗色　しまりあり　粘性あり　LB（～10mm）を極微量、KP（～5mm）を少量含む
B. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）・KP（～5mm）を極微量含む
C. 暗色　しまりあり　LBを極微量、KP（～5mm）を10%含む
D. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～20mm）・KP（～5mm）を少量含む
E. にぶい黒褐色　しまりあり　粘性あり　LBを少量、KP（～10mm）を7%含む
F. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～10mm）・KP（～5mm）を少量含む
G. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LBを極微量、KP（～5mm）を10%含む
H. 黒褐色　しまりあり　粘性あり　軟質土
I. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LB（～30mm）を少量、KP（～5mm）を10%含む
J. 暗褐色　しまりあり　粘性あり　LBを10%含む

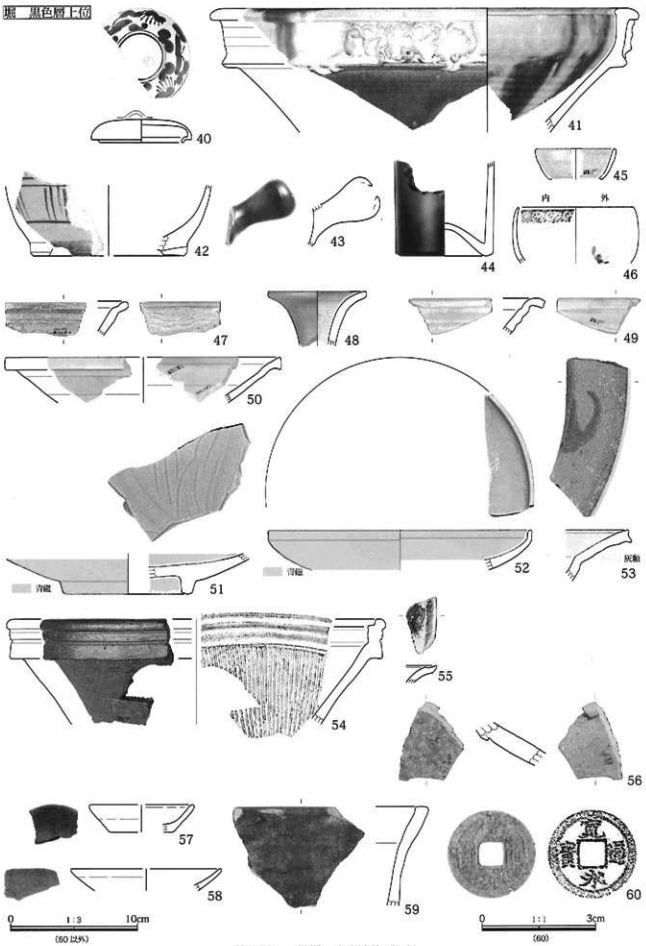
堀　埋め土



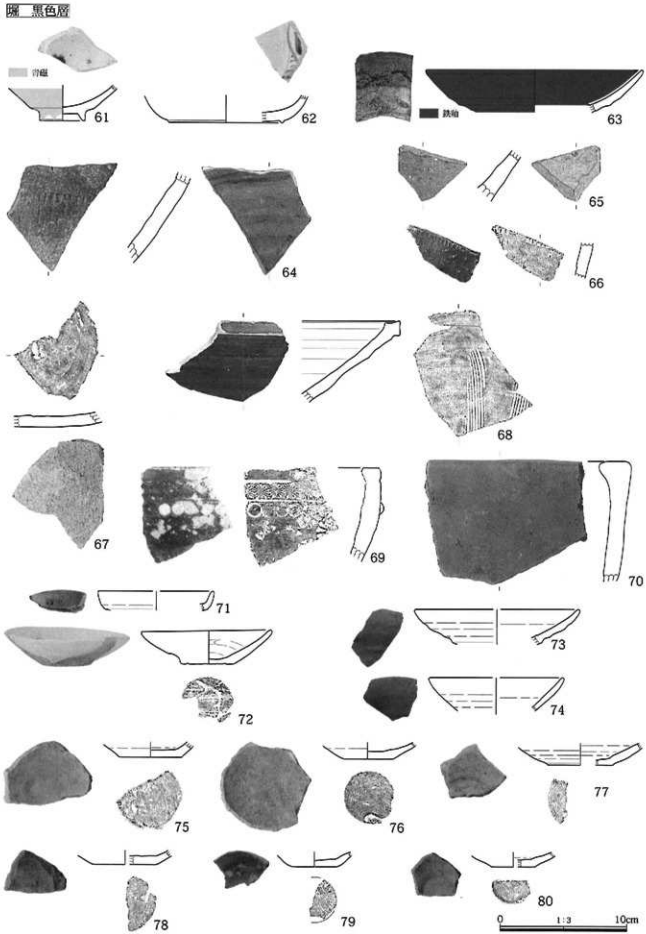
第７図　外堀　断面図及び出土遺物（１）


埋め土
内
外
14
18
20
15
21
19
13
16
17
22
23
26
24
25
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
1:3
10cm

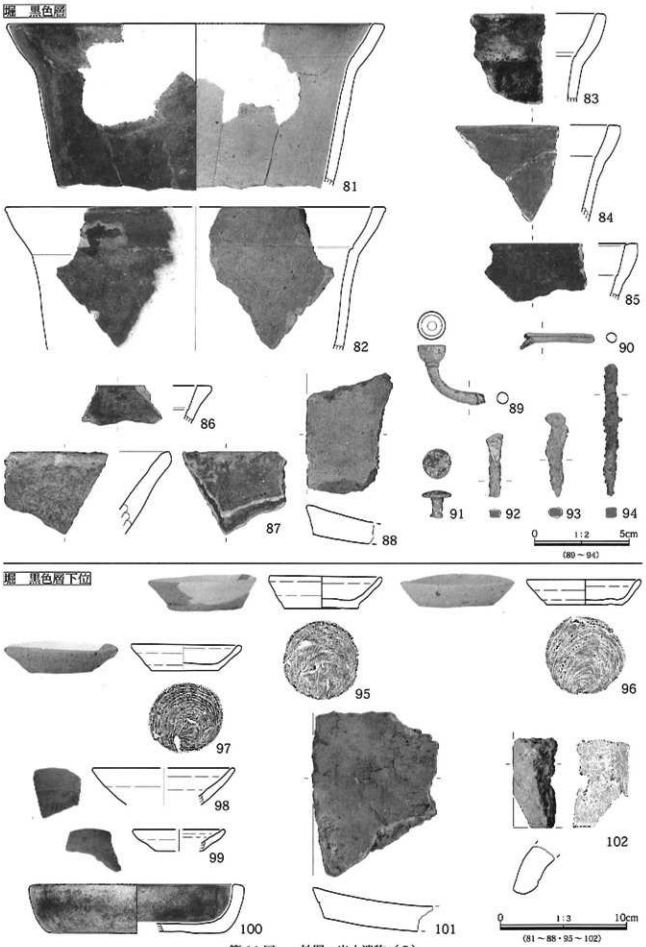
第8図　外堀　出土遺物（2）


堀　黒色層上面
40
41
42
43
44
45
内
外
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
1:3
10cm
(60以外)
0
1:1
3cm
(60)

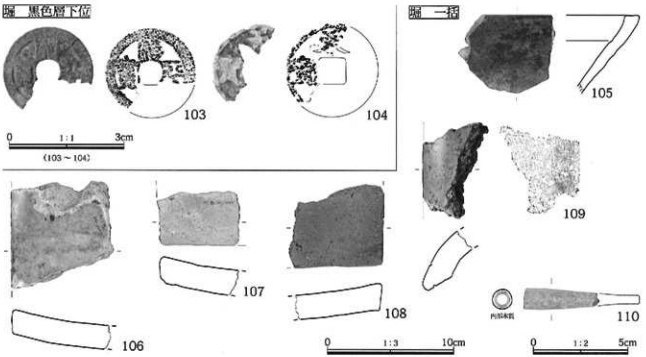
第9図　外堀　出土遺物（3）



第10図　外堀　出土遺物（4）



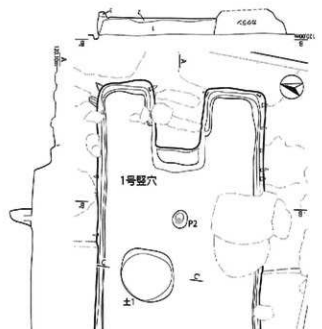
第11図　外堀　出土遺物（5）



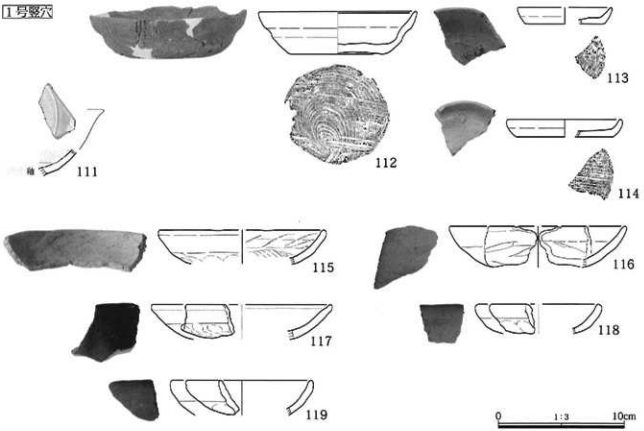
第 12 図　外堀　出土遺物（6）

1 号竪穴

本遺構は調査区の南部で確認された。平面形状は長方形で、西部はカクランによりローム面が削られており、壁面が失われている。規模は、長軸が残存値で約 4.5m、短軸が約 2.7m となり、N－78°－E に傾く。深さは確認面から約 25cm である。東辺中央の内部には階段状の張り出し施設を持つ。また壁面下には壁周溝が巡らされている。ただし西部はカクランにより壁周溝のみ残存している。壁面には直径約 5 cm、奥行き約 10cm 程度の穴が規則的に確認された。竪穴内部には、土坑が 1 基と東西の軸状に柱穴が 2 基確認された。出土遺物は、遺構中央付近からは近代の磁器やガラス瓶が出土したため、掘削当初は近・現代に掘り込まれたカクランか、防空壕などを想定した。一方、遺構の東部の覆土からは 13 世紀前半のかわらけ片が多数確認され（112 ～ 119）、特に 112 は全体が接合するかわらけであった。遺構の中央には複数のカクランが重複しており、近・現代の遺物はカクランの遺物の可能性がある。本書においては 13 世紀前半の遺構として扱ったが、戦中の防空壕などの検討も必要となる。



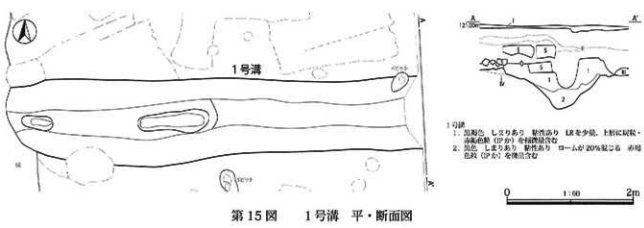
第 13 図　1 号竪穴　平・断面図



第 14 図　　1 号竪穴　出土遺物

1 号溝

本遺構は調査区北部で確認された。遺構は東西に伸び、東部は調査区外、西部は堀に切られている。規模は、長さが残存値で約 6.6m、幅は約 1.3m となり、N － 88° － E に傾く。深さは確認面から約 56cm となる。調査区の東壁付近には 4 ピットが重複するが、新旧関係は不明であった。底部中央と西部はピット状に掘りこまれている。出土遺物は、土師器あるいはかわらけ片がごく少量出土した。時期は、出土遺物がほとんどなく手がかりに乏しいが、近代の遺物がないため、土墓以前の遺構とした。



第 15 図　　1 号溝　平・断面図

1号土坑

本遺構は調査区北部で確認された。平面形状は円形で、断面形状は不整形な皿型となる。遺構南部がわずかにカクランに切られる。規模は、直径が約2.4m、深さは確認面から約30cmとなる。出土遺物に近代の遺物を含まないことから、土墨以前の遺構と考えられる。

3号土坑

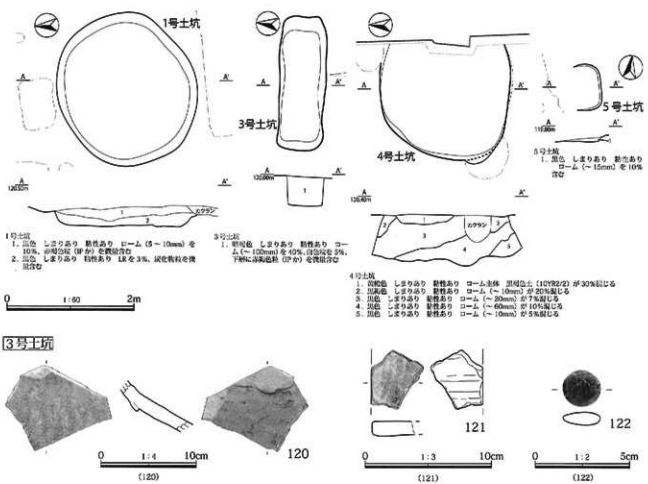
本遺構は調査区中央部で確認された。平面形状は長方形で、断面形状は箱型となる。規模は、長軸が約2m、短軸が約73cmとなり、N－88°－Eに傾く。深さは確認面から約45cmとなる。出土遺物は、常滑焼甕片(120)・砥石(121)・碁石（122）が出土している。近代の遺物を含まないことから、土墨以前の遺構と考えられる。

4号土坑

本遺構は調査区中央部で確認された。平面形状はやや不整な円形で、遺構の東部は調査区外となり、南部は壁際に伸びるカクランが重複する。断面形状は壁がややオーバーハングしたフラスコ型となる。規模は、最大径が約2.1m、深さは確認面より約80cmとなる。出土遺物に近代の遺物を含まないことから、土墨以前の遺構と考えられる。

5号土坑

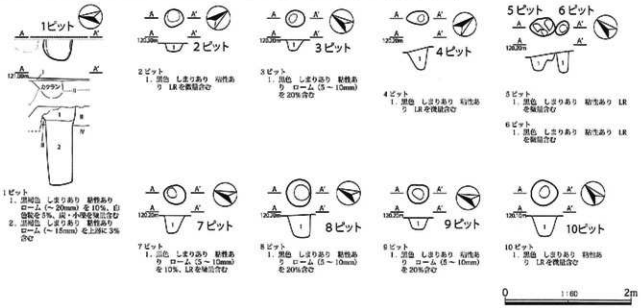
本遺構は調査区南部で確認された。平面形状はやや隅丸の方形とみられるが、遺構上面と西側はカクランにより大きく削られている。断面形状はおおよそ箱型となる。規模は、長軸が約72cm、短軸が残存値で約41cmとなり、N－88°－Eに傾く。深さは東部寄りで確認面より約7cmとなる。出土遺物に近代の遺物を含まないことから、土墨以前の遺構と考えられる。



第16図　土坑　平・断面図及び出土遺物

ピット

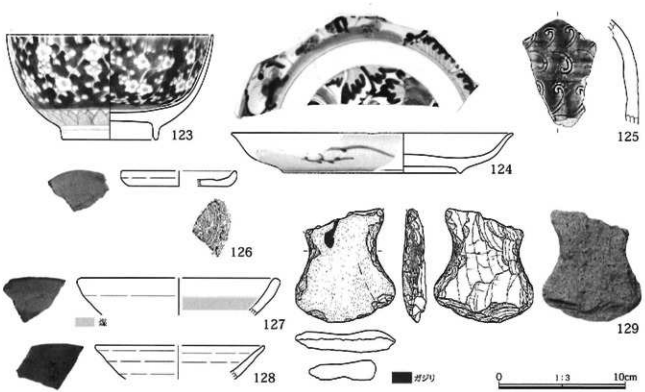
ピットは10基を確認した。このほかに調査区内ではピット状のカクランも複数確認された。ピットとピット状のカクランの覆土は、どちらも黒色土がベースであるため遺構の区別は困難であるが、近代の遺物が出土したものをカクランとした。このため、ピットとした10基も近代以降に帰属する可能性もある。



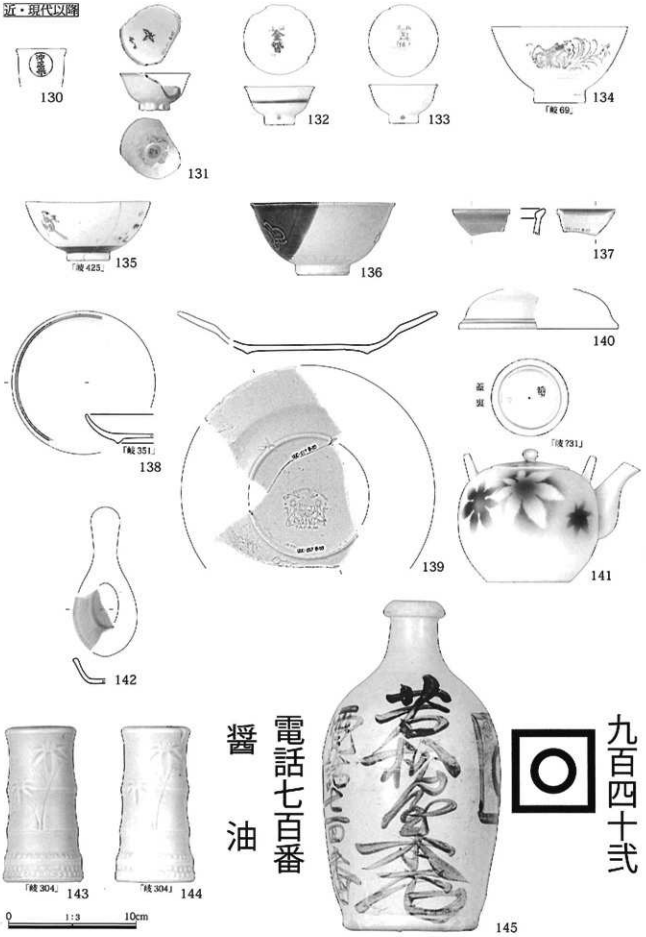
第17図　ピット　平・断面図

遺構外遺物

遺構外遺物はⅡ層やカクランから出土した遺物を掲載した。打製石斧や中・近世の陶磁器のほか、近・現代の遺物も掲載した。近・現代の遺物では宇都宮市内の商店や病院名などが記載された資料や商品名のある資料、さらに戦時下の生産者番号が記載された資料などを掲載した。



第18図　表土・カクラン　出土遺物（1）



第19図　表土・カクラン　出土遺物（2）

第20図　表土・カクラン　出土遺物（3）

第３表　出土遺物観察表

（　）内は残存値、＜　＞内は推定値を示す

No.	出土遺構	種別	器種	残存	口径・底径・器高 (cm)	色調	備　考
1	外堀 埋め土	磁器	碗	口縁～高台部 1/5	<8.8>・<3.8>・4.4	白色	内外面染付。近代。
2	外堀 埋め土	磁器	碗	口縁～高台部 1/2	7.4・4.0・4.5	白色	無紋。近代。
3	外堀 埋め土	磁器	碗	口縁～高台部 1/2	<11.0>・3.6・5.2	白色	内外面型紙捺染。蛸・亀甲模様。近代。
4	外堀 埋め土	磁器	碗	口縁～高台部 1/5	<11.5>・<3.9>・4.4	白色	外面染付。近代。
5	外堀 埋め土	磁器	蓋	完形	7.4・―・1.1	七宝：青色 花：緑色	外面染付。型紙捺染。近代。
6	外堀 埋め土	磁器	蓋	摘み～口辺部 2/3	―・―・(4.0)	岩茶色	青磁。空気穴あり。近代か。
7	外堀 埋め土	陶器	蓋	底部 4/5	―・4.1・(1.3)	内：灰オリーブ色（7CY6/2） 外：にぶい黄橙色（10YR6/3）	益子焼か。摘み状突起。
8	外堀 埋め土	陶器	蓋	天井～口縁部 1/6	14.5・―・(2.5)	灰白色（5Y7/2）	内外面一部に灰釉。
9	外堀 埋め土	瓦質土器	火鉢	口縁～胴部 破片	<21.8>・―・(7.5)	黒色（2.5Y2/1）	外面黒色。被状文。
10	外堀 埋め土	磁器	レンゲ	柄 破片	長・幅・厚 (5.4)・(4.4)・(1.5)	明緑灰色（7.5GY8/1）	底面に「寿」文。周囲に梅樹の染付。
11	外堀 埋め土	ガラス	瓶	口～胴部 破片	―・―・(10.0)	鶯茶色	
12	外堀 埋め土	ガラス	瓶	胴～底部 1/6	―・6.3・(8.0)	茶色	
13	外堀 埋め土	陶器	皿	底～高台部 破片	―・―・(2.8)	淡黄色（2.5Y8/3）	瀬戸・美濃。
14	外堀 埋め土	磁器	碗	口縁～胴部 1/4	<10.4>・―・(5.0)	明緑灰色（10GY8/1）	内外面染付。19 世紀。
15	外堀 埋め土	磁器	碗	口縁～胴部 1/8	<10.2>・―・(4.4)	明緑灰色（7.5GY8/1）	くらわんか碗。こんにゃく判。18 世紀後半。
16	外堀 埋め土	磁器	碗	胴～高台部 1/5	―・5.0・(3.2)	灰白色（7.5GY8/1）	外面染付。19 世紀後半。
17	外堀 埋め土	磁器	碗	底～高台部 破片	―・<4.9>・(1.9)	薄明紫色	青磁。
18	外堀 埋め土	陶器	天目	口縁～胴部 破片	<12.2>・―・(4.2)	黒褐色（7.5YR2/2）	瀬戸・美濃。
19	外堀 埋め土	陶器	向付か	胴～底部 破片	―・―・(6.0)	灰白色（2.5Y8/2）	瀬戸・美濃。
20	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<95.0>・<4.4>・(2.2)	灰白色（10YR8/2）	ロクロ成形。
21	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<9.3>・<4.4>・3.0	にぶい黄橙色（10YR7/3）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
22	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<10.4>・<4.0>・3.3	にぶい黄橙色（10YR7/3）	ロクロ成形。
23	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<11.0>・―・(2.4)	にぶい黄橙色（10YR7/2）	ロクロ成形。
24	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<11.2>・―・(2.4)	灰白色（10YR8/2）	ロクロ成形。
25	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<11.1>・―・(2.7)	浅黄橙色（10YR8/3）	ロクロ成形。
26	外堀 埋め土	かわらけ	皿	口縁～胴部 1/8	<11.8>・―・(3.0)	浅黄橙色（7.5YR8/3）	ロクロ成形。
27	外堀 埋め土	かわらけ	皿	胴～底部 破片	―・<4.4>・(1.8)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。
28	外堀 埋め土	かわらけ	皿	胴～底部 破片	―・4.6・(1.9)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
29	外堀 埋め土	かわらけ	皿	胴～底部 1/5	―・4.2・(2.5)	浅黄橙色（10YR8/3）	ロクロ成形。底部板目。
30	外堀 埋め土	かわらけ	皿	胴～底部 1/4	―・5.0・(2.4)	浅黄橙色（10YR8/3）	ロクロ成形。底部糸切り後調整。底部板目。
31	外堀 埋め土	土師質 土器	鍋	胴～底部 破片	―・<24.0>・(4.4)	明褐色（7.5YR5/6）	
32	外堀 埋め土	土師質 土器	鍋	胴部 破片	―・―・(4.7)	明褐色（7.5YR5/6）	
33	外堀 埋め土	土師質 土器	鍋	胴～底部 破片	―・―・(3.0)	にぶい橙色（7.5YR6/4）	
34	外堀 埋め土	土師質 土器	鍋	胴～底部 破片	―・<14.0>・(3.4)	明褐色（7.5YR5/6）	
35	外堀 埋め土	土師質 土器	焙烙	口縁～底部 1/6	<35.6>・<31.8>・6.2	明褐色（7.5YR5/6）	
36	外堀 埋め土	土師質 土器	焙烙	口縁～胴部 破片	<17.6>・―・(3.3)	橙色（5YR7/6）	
37	外堀 埋め土	瓦	平瓦	1/4	長・幅・厚 (12.7)・(9.0)・1.6	褐灰色（10YR6/1）	
38	外堀 埋め土	瓦	平瓦	破片	長・幅・厚 (6.9)・(7.2)・1.9	灰色（N6/0）	
39	外堀 埋め土	石製品	硯	1/2	長・幅・厚 (8.3)・(6.5)・(2.0)	灰褐色（7.5YR5/2）	『赤間　大森』。
40	外堀 黒色土上層	磁器	蓋	天井～口縁部 2/3	6.6・―・(1.8)	白色	外面染付。把手面離痕あり。

（ ）内は残存値、〈 〉内は推定値を示す

No.	出土遺構	和別	器種	残存	口径・底径・器高 (cm)	色調	備考
41	外堀 黒色土上層	陶器	鉢	口縁～胴部 破片	<32.2>・—・(9.8)	内：褐色（10YR4/6） 外：オリーブ黄色（5Y6/3）	袋子。貼付文手水鉢。近代。
42	外堀 黒色土上層	陶器	鉢か	胴～底部 1/8	—・<11.9>・(5.6)	淺黄色（5Y7/3）	外面染付。近代。
43	外堀 黒色土上層	陶器	鉢か	把手	長・幅・孔歪 (6.7)・3.4・0.9	極暗褐色（5YR2/4）	行平鍋か。19 世紀。
44	外堀 黒色土上層	ガラス	瓶	胴～底部 1/6	—・6.8・(7.5)	茶色	
45	外堀 黒色土上層	陶器	壺	口縁～胴部 破片	<6.2>・—・(2.4)	灰オリーブ色（5Y6/2）	瀬戸・美濃。18 世紀。
46	外堀 黒色土上層	磁器	碗	口縁～胴部 1/8	<9.2>・—・(4.4)	明緑灰色（7.5GY8/1）	備前。内外面染付。19 世紀。
47	外堀 黒色土上層	陶器	鉢か	口縁部 破片	<30.4>・—・(2.7)	灰オリーブ色（5Y5/3）	
48	外堀 黒色土上層	磁器	徳利	口縁～頸部 破片	<7.6>・—・(4.3)	白緑色	備前。青磁。
49	外堀 黒色土上層	陶器	鉢	口縁～胴部 破片	<24.0>・—・(2.8)	オリーブ黄色（5Y6/3）	瀬戸・美濃。
50	外堀 黒色土上層	陶器	皿	口縁～胴部 破片	<21.6>・—・(3.6)	灰白色（2.5Y8/2）	
51	外堀 黒色土上層	磁器	皿	胴～高台部 1/8	—・<9.5>・(3.2)	灰白色（10Y7/1）	青磁。鐘に印付箋。内面に線状の施文。
52	外堀 黒色土上層	磁器	皿	口縁～胴部 1/10	<20.7>・—・(3.1)	薄明黒色	波佐見。青磁。内面に施文。17 世紀。
53	外堀 黒色土上層	陶器	皿	口縁部 破片	<42.6>・—・(4.0)	灰オリーブ色（5Y5/2）	唐津。
54	外堀 黒色土上層	陶器	擂鉢	口縁～胴部 破片	<29.3>・—・(8.4)	暗赤褐色（5YR3/2）	明。
55	外堀 黒色土上層	陶器	甕・瓶類	口縁部 破片	<26.6>・—・(1.4)	灰白色（N7/0）	常滑。12 世紀代。内外面に自然釉。
56	外堀 黒色土上層	陶器	不明	破片	長・幅・厚 (5.8)・(5.2)・1.4	灰オリーブ色（7.5Y5/2）	常滑。
57	外堀 黒色土上層	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<8.1>・<5.0>・(2.2)	橙色（5YR6/6）	ロクロ成形。
58	外堀 黒色土上層	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<11.8>・—・(1.7)	淺黄橙色（10YR8/3）	ロクロ成形。
59	外堀 黒色土上層	土師質 土器	鍋	口縁～底部 破片	—・—・(7.9)	にぶい赤褐色（5YR5/4）	
60	外堀 黒色土上層	金属製品	銭	完形	径・厚 (2.3)・0.1		寛永通宝。
61	外堀 黒色土	磁器	碗	胴～高台部 破片	—・3.4・(2.8)	オリーブ灰色（10Y6/2）	外面青磁。内面染付。肥前。18 世紀。
62	外堀 黒色土	陶器	壺	胴～底部 破片	—・<9.0>・(2.2)	淡黄色（2.5Y8/3）	瀬戸・美濃。内面染付。18・19 世紀。
63	外堀 黒色土	陶器	瓶	口縁～胴部 1/10	<17.1>・—・(3.4)	褐色（7.5YR4/3）	初山か。内外面に鉄釉。16 世紀後半。
64	外堀 黒色土	陶器	壺	胴部 破片	—・—・(7.1)	灰色（7.5Y6/1）	瀬戸。外面古い甲者文。内面黒色処理。12 ～ 13 世紀。
65	外堀 黒色土	陶器	擂鉢	口～胴部 破片	—・—・(4.0)	灰黄褐色（10YR5/2）	内面磨耗。
66	外堀 黒色土	陶器	甕	胴部 破片	—・—・(2.8)	灰黄褐色（10YR4/2）	
67	外堀 黒色土	陶器	擂鉢	底部 破片	—・—・(1.2)	橙色（5YR6/6）	内面摩滅。
68	外堀 黒色土	陶器	擂鉢	口縁～胴部 破片	—・—・(6.4)	黒褐色（5YR2/2）	瀬戸・美濃。大窯後期。16 末～ 17 世紀。
69	外堀 黒色土	瓦質土器	火鉢	口縁～胴部 破片	<28.4>・—・(7.4)	黒色（2.5CY2/1）	外面印形側線痕。
70	外堀 黒色土	土師質 土器	火鉢か	口縁～胴部 破片	—・—・(9.5)	にぶい赤褐色（2.5YR4/4）	
71	外堀 黒色土	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<9.0>・<7.3>・(1.5)	にぶい橙色（7.5YR7/4）	
72	外堀 黒色土	かわらけ	皿	口縁～底部 1/3	10.4・4.3・2.6	にぶい黄橙色（10YR7/3）	内外面ナデ。ロクロ成形。干し台痕あり。
73	外堀 黒色土	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<12.9>・—・(2.8)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。
74	外堀 黒色土	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<10.5>・—・(2.6)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。
75	外堀 黒色土	かわらけ	皿	胴～底部 1/4	—・5.0・(1.2)	にぶい黄橙色（10YR6/3）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
76	外堀 黒色土	かわらけ	皿	胴～底部 1/5	—・3.9・(1.3)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
77	外堀 黒色土	かわらけ	皿	胴～底部 破片	—・<5.1>・(1.7)	にぶい黄橙色（10YR7/3）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
78	外堀 黒色土	かわらけ	皿	胴～底部 破片	—・5.0・(1.1)	淺黄色（10YR8/3）	ロクロ成形。底部に板目。
79	外堀 黒色土	かわらけ	皿	胴～底部 破片	—・<3.7>・(1.2)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
80	外堀 黒色土	かわらけ	皿	胴～底部 破片	—・<3.4>・(1.2)	にぶい黄橙色（10YR7/3）	ロクロ成形。底部回転糸切り。

〈 〉内は現存値、< >内は推定値を示す

No.	出土遺構	種別	器種	現存	口径・底径・器高 (cm)	色調	備 考
81	外堀 黒色土	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	<29.4>・—・〈13.1〉 1/5	にぶい赤褐色 (5YR7/6)	
82	外堀 黒色土	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	<29.9>・—・〈11.3〉	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	
83	外堀 黒色土	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	—・—・〈7.0〉	橙色 (7.5YR6/6)	
84	外堀 黒色土	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	—・—・〈7.7〉	明褐色 (7.5YR5/8)	
85	外堀 黒色土	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	—・—・〈4.4〉	明赤褐色 (5YR5/6)	
86	外堀 黒色土	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	<18.8>・—・〈3.0〉	灰褐色 (7.5YR5/2)	
87	外堀 黒色土	瓦質土器	鉢	口縁～胴部 破片	—・—・〈8.5〉	褐灰色 (10YR4/1)	内外面剥離。
88	外堀 黒色土	瓦	平瓦	破片	長・幅・厚 (9.4)・(6.5)・1.8	オリーブ黒色 (10Y3/1)	
89	外堀 黒色土	金属製品	煙管	1/4	火口径・管径・雁高 1.5・(0.6～0.7)・(3.0)		雁首。
90	外堀 黒色土	金属製品	煙管	1/4	長・厚 (4.0)・(0.5～0.9)		銀字か。
91	外堀 黒色土	金属製品	銭	破片	長・幅 (1.5)・(0.5～1.5)		
92	外堀 黒色土	金属製品	釘か	不明	長・本体径 (3.4)・0.3×0.4		周囲に銹付着。
93	外堀 黒色土	金属製品	釘か	不明	長・本体径 (4.5)・0.4×0.6		周囲に銹付着。
94	外堀 黒色土	金属製品	釘か	不明	長・本体径 (7.1)・0.4×0.4		周囲に銹付着。
95	外堀 黒色土下層	かわらけ	皿	口縁～底部 4/5	<8.7>・5.9・2.6	橙色 (7.5YR7/6)	底部回転糸切り（左回転）。
96	外堀 黒色土下層	かわらけ	皿	完形	8.9・6.0・2.0	橙色 (5YR6/8)	底部回転糸切り（左回転か）。
97	外堀 黒色土下層	かわらけ	皿	口縁～底部 3/4	8.5・5.4・2.1	明赤褐色 (5YR5/8)	底部回転糸切り（左回転か）。
98	外堀 黒色土下層	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<11.2>・—・〈2.9〉	浅黄橙色 (10YR8/3)	
99	外堀 黒色土下層	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<7.2>・—・〈1.7〉	灰白色 (7.5YR8/2)	
100	外堀 黒色土下層	土師質 土器	小型鍋格	口縁～底部 1/3	<15.9>・<13.8>・3.9	明褐色 (7.5YR5/6)	小型焙烙。
101	外堀 黒色土下層	瓦	平瓦	破片	長・幅・厚 (7.4)・(7.3)・2.0	褐灰色 (10YR5/1)	
102	外堀 黒色土下層	瓦	丸瓦	破片	長・幅・厚 (6.7)・(4.0)・1.9	褐灰色 (10YR6/1)	
103	外堀 黒色土下層	金属製品	銭	2/3	径・厚 (2.3)・0.1		治平元宝（篆書）か。北宋（1064～1067）。
104	外堀 黒色土下層	金属製品	銭	1/2	径・厚 (2.3)・0.1		天聖元宝（真書）か。北宋（1023）。
105	外堀	土師質 土器	鍋	口縁～胴部 破片	<28.0>・—・〈6.2〉	橙色 (5YR6/6)	
106	外堀	瓦	平瓦	破片	長・幅・厚 (7.4)・(7.3)・1.8	褐灰色 (10YR5/1)	
107	外堀	瓦	平瓦	破片	長・幅・厚 (6.4)・(3.9)・1.9	灰色 (N4/0)	
108	外堀	瓦	平瓦	破片	長・幅・厚 (6.1)・(7.2)・2.0	灰色 (N4/0)	
109	外堀	瓦	丸瓦	破片	長・幅・厚 (7.0)・(5.7)・1.9	褐灰色 (10YR5/1)	
110	外堀	金属製品	煙管	1/4	口径・長・本体径 0.7～1.1・(4.2)・0.8～1.2		吸い口か。
111	1号發穴 中央部	磁器	碗	底部 破片	—・—・〈2.1〉	内：灰白色 (5Y7/2) 外：灰白色 (5Y7/1)	白磁。12 世紀。
112	1号發穴 底部	かわらけ	皿	体部完形	12.5・7.5・3.4	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	ロクロ成形。底部回転糸切り（右回転）。煤竹圧痕。
113	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<7.4>・<6.1>・1.3	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ロクロ成形。
114	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<9.0>・<7.7>・1.4	浅黄橙色 (10YR8/4)	ロクロ成形。干し台痕あり。
115	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<13.1>・—・〈2.7〉	浅黄橙色 (10YR8/3)	ロクロ成形。
116	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<13.9>・—・〈3.2〉	灰白色 (10YR8/2)	非ロクロ成形。
117	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<14.2>・—・〈2.7〉	内：浅黄橙色 (10YR8/3) 外：黒褐色 (10YR3/2)	非ロクロ成形。
118	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<9.6>・—・〈2.3〉	浅黄橙色 (10YR8/3)	非ロクロ成形。
119	1号發穴 底部	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<11.0>・—・〈2.8〉	灰黄褐色 (10YR6/2)	非ロクロ成形。
120	3号土坑	陶器	壺	破片	長・幅・厚 (8.6)・(11.1)・1.4	灰オリーブ色 (7.5Y5/2)	常滑。

（ ）内は現存値、〈 〉内は推定値を示す

No.	出土遺構	種別	器種	残存	口径・底径・器高 (cm)	色調	備考
121	3号土坑	石製品	硯石	破片	長・幅・厚 (4.5)・(4.1)・1.1	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粗灰岩。
122	3号土坑	石製品	砥石	完形	長・幅・厚 2.0・1.9・0.7	黒色	蛇紋岩か。
123	表土・攪乱	磁器	鉢	口縁～高台部 1/2	16.2・7.3・8.3	白色	内外面染付。19 世紀。
124	表土・攪乱	磁器	皿	口縁～高台部 1/3	<22.3>・14.0・3.2	明緑灰色（7.5GY8/1）	輪花。内外面染付。19 世紀前半。
125	表土 調査区南	陶器	壺頸	胴部 破片	—・—・(8.3)	内：暗灰黄色（2.5Y4/2） 外：灰白色（2.5Y8/2）	瀬戸・美濃。古瀬戸中期。14 世紀初～中期。
126	表土・攪乱	かわらけ	皿	口縁～底部 破片	<9.0>・<8.0>・1.2	灰黄褐色（10YR6/2）	ロクロ成形。底部回転糸切り。
127	表土・攪乱	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<15.4>・—・(2.9)	灰白色（10YR8/2）	ロクロ成形。
128	表土・攪乱	かわらけ	皿	口縁～胴部 破片	<13.3>・—・(2.7)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形。
129	表土・攪乱	石製品	打製石斧	2/3か	長・幅・厚 (8.9)・7.8・1.8		安山岩。128.86g。縄文時代。
130	表土・攪乱	磁器	猪口	口縁～胴部 1/3	3.7・—・(3.0)	白色	「和正宗」。
131	表土・攪乱	磁器	猪口	口縁～高台部 2/3	<5.5>・2.2・2.9	白色（模様は藍色）	模型皿。内面に星。金字で「五歩」。
132	1号堆穴 中央部	磁器	猪口	完形	5.5・2.2・3.0	白色	「金婚」。外部に具象画。高台部に1か所穿孔。
133	1号堆穴 中央部	磁器	猪口	完形	5.1・2.1・3.1	白色	「金婚」。高台部に1か所穿孔。
134	表土・攪乱	磁器	碗	口縁～高台部 1/3	<10.8>・<3.9>・6.0	白色	生産者番号「崚 69」。
135	表土・攪乱	磁器	碗	口縁～高台部 1/2	9.6・3.1・4.6	白色（模様は藍色）	子ども茶碗（木馬・でんでん太鼓・ラッパ）。生産者番号「□（崚か）425」。
136	表土・攪乱	磁器	碗	ほぼ完形	11.4・3.9・5.7	緑色・茶色	松・竹・梅の模様。
137	表土・攪乱	磁器	小型の鉢か	口縁～胴部 破片	—・—・(2.1)	オリーブ灰色（5GY6/1）	
138	表土・攪乱	磁器	小皿	口縁～高台部 1/2	11.3・6.3・2.3	灰白色（2.5Y8/2）	工場食器。生産者番号「崚 351」。
139	表土・攪乱	磁器	皿	口縁～底部 1/5	<20.3>・9.6・3.3	白色	加賀製陶所。20 世紀中期。
140	表土・攪乱	磁器	蓋	天井～口縁部 1/6	<12.6>・—・(3.2)	灰白色（2.5Y8/2）	工場食器。
141	表土・攪乱	磁器	急須	完形	6.2・6.5・10.5	白色・青色	生産者番号「崚口 31」。
142	表土・攪乱	磁器	レンゲ	匙 破片	長・幅・高 (4.9)・(2.9)・(2.0)	黄色（2.5Y7/8）	眼平。
143	表土・攪乱	磁器	花瓶	底部完形	4.5・5.9・12.4	薄緑色	144 と一対の仏花用か。 生産者番号「崚 304」。
144	表土・攪乱	磁器	花瓶	底部完形	4.5・5.9・12.4	薄緑色	143 と一対の仏花用か。 生産者番号「崚 304」。
145	表土・攪乱	陶器	徳利	完形	3.0・9.4・26.2	象牙色	「若松屋本店」。
146	表土・攪乱	陶器	徳利	完形	2.6・8.0・23.8	象牙色	「三好屋」。
147	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	1.8・4.9・13.1	薄緑色	「イマヅ」。側面にエンボスで「意匠登録 39751號」「45 五入」。酒類・飲食部。
148	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	2.3・4.3・14.0	透明	「中田産婦人科醫院」。側面にメモリ付き。
149	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	1.6・3.6・9.0	淡褐色	「ロート目薬　本舗山田安民」。
150	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	1.8・3.5・9.4	透明	「八號汁匂え」。瓶版か。
151	表土・攪乱	ガラス	瓶	底部完形	—・3.6・(11.0)	褐色	「セーキット」。
152	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	0.9・2.5・7.1	淡褐色	「浜金水　愛生堂」。
153	1号堆穴 中央部	ガラス	瓶	完形	0.9・2.7・6.8	透明	側面にメモリ。薬瓶か。
154	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	1.5・0.5・7.4	黄色	「SANTENDO」。参天堂の両口式点眼瓶。
155	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	4.2・4.4・5.5	黒色	「HAKAMADA　SEIYAKUSHO TOKYOU」。美容瓶。
156	表土・攪乱	陶器	瓶	底部完形	6.4・6.7・5.5	白色	「アロシープ」。
157	表土・攪乱	ガラス	薬香器	完形	2.2・4.7・7.5	透明	
158	表土・攪乱	ガラス	瓶	口縁～底部 2/3	4.9・5.4・5.6	白色	「メヌマポマード」（大）。整髪剤。大正 6 年発売。
159	1号堆穴 中央部	ガラス	瓶	口縁～底部 4/5	4.0・4.6・4.6	白色	「メヌマポマード」（小）。整髪剤。大正 6 年発売。
160	1号堆穴 中央部	ガラス	瓶	完形	2.5・4.8・6.5	透明	インクボトル。
161	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	1.6・4.2・5.6	透明	筆記インキ。SIMCO 製。
162	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	4.7・4.7・4.3	緑青色	「自転車塗料」。鞍塗布剤。
163	表土・攪乱	ガラス	瓶	完形	4.5・4.5・4.3	青緑色	ヤマト鋼。20 世紀初～中期。
164	1号堆穴 中央部	金属製品	煙管	1/4	火皿径・首径・雁首 1.0・(0.8～1.0)・(1.7)		雁首。

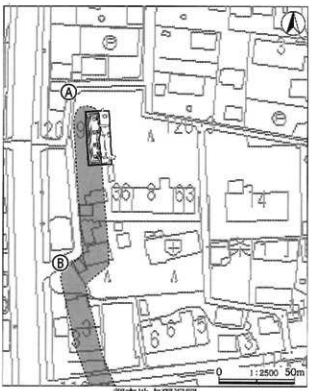
第Ⅲ章　まとめ

今回の調査では堀、竪穴遺構、土坑、溝、ピットが確認された。この内、堀は調査区の西半部を占めている。堀は東の立ち上がりが確認されたが、南北と西は調査区外となり遺構全体の姿は把握できなかった。

調査区周辺を江戸時代の宇都宮城の絵図と比較してみると、現在の道路は江戸時代から踏襲されている。この道路の位置から、調査区が宇都宮城の松ヶ峰門から南に延びる空堀と土塁に該当しており、今回調査した堀は宇都宮城の外堀に当たることが分かった。また、調査区西の道路は江戸時代の堀に沿った道路を踏襲していることから、堀は道路までと想定され、幅は東の上端からおおよそ 16m 程度であったものと考えられる。

一方、堀の東部は土塁があった箇所であるが、土塁の痕跡は確認できなかった。ローム面では竪穴遺構や土坑、溝などが確認されたほか、近代以降のカクランが全面に広がっている。これらの遺構は土塁以前の遺構か、削平された以後の遺構と考えられるが、近・現代の遺物は出土していないため、土塁が造られる以前の遺構と考えられる。この中で竪穴遺構はカクランの遺物が一部混じってはいたものの、かわらけや青磁片がまとまって確認できた。これらは 13 世紀前半の遺物とみられ、この時期は宇都宮城の本丸で確認される最も初期の段階と同時期となる。調査区周辺では、本丸周辺の開発と同時期となる活動の痕跡が認められた。ただし、この時期には堀や土塁はなく、調査区周辺が城域ではなかったものと推定される。

なお、堀と土塁の存在した時期については、堀からの出土遺物では 13 世紀前半～近代にいたる遺物が出土している。堀の終焉については、堀の埋め土から近代の遺物などが出土し、明治期であることが確認できた。一方、堀の掘削された時期については、土塁の下部にあたる箇所から 13 世紀前半の遺構が確認されたため、土塁はそれ以降に造られたこととなるが、詳細な時期については分からなかった。今後、土塁の下部より、13 世紀前半より新しい時期の遺構が確認されれば、堀と土塁が造られた時期が特定される可能性がある。



調査地点現況図

「宇都宮城下絵図」（延命院蔵）（1710～1749頃）切り抜き

第 21 図　　宇都宮城下絵図と調査地点 比較図

Ⓐ点地から南下し、西にわずかに屈曲するⒷ地点に至る様子が城絵図と共通しており、現在の道路が当時の道を踏襲していることがわかる。

写　真　図　版

1．調査区全景　直上（上が北）

1．遺構確認状況　全景（南から）

2．外堀　掘削状況（北から）

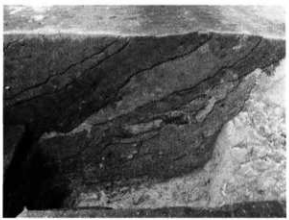
3．外堀　全景（南西から）

4．ローム面　全景（南から）

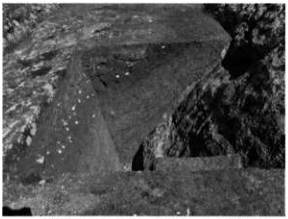
5．外堀　北セクション（南から）

6．外堀　トレンチ1　セクション（南から）

7．外堀　トレンチ1　遺物出土状況（直上）



8．外堀　トレンチ2　セクション（南から）



1．外堀　トレンチ3　セクション（南から）

2．外堀　トレンチ4　セクション（北から）

3．1号竪穴　完掘（西から）

4．1号竪穴　壁面穴（北から）

5．1号溝　完掘（東から）

6．1号土坑　完掘（西から）

7．3号土坑　完掘（南から）

8．4号土坑　完掘（南西から）

報告書抄録

ふりがな	うつのみやじょうせき
書名	宇都宮城跡
副書名	令和３年度調査
巻次	
シリーズ名	
編著者名	青木 利文・近藤　真
編集機関	株式会社真和技研
	〒321-4351　栃木県真岡市中 287-3
発行機関	宇都宮市教育委員会
	〒320-8540　栃木県宇都宮市旭 1-1-5
発行年月日	西暦 2021 年（令和３年）12 月 27 日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
宇都宮城跡	栃木県 宇都宮市一条１丁目３－７	09201	UUC-157	36°55′52″	139°87′97″	2021.3.15 ～ 2021.4.20	565.5㎡	集合住宅 建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇都宮城跡	城館跡	中世	墓穴　1 基 溝　1 条 土坑　4 基 ピット　10 基	かわらけ 陶器 磁器	土塁築造以前の遺構群と考えられる。
		近世・近代	宇都宮城外堀	陶磁器 瓦質土器 瓦 かわらけ 石製品 金属製品 ガラス製品	堀は近世宇都宮城の外堀に当たる。
		近・現代		陶磁器 ガラス製品 石製品	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書　第 111 集

宇都宮城跡

―令和３年度調査―

発　行　宇都宮市教育委員会
栃木県宇都宮市旭１丁目１番５号
TEL 028 － 632 － 2764

編　集　株式会社 真和技研
栃木県真岡市中 287 － 3
TEL 0285 － 84 － 7227

発行日　令和３年 12 月 27 日発行

印　刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町 67 番地
TEL 027 － 251 － 1212